

「現世利益和讃」の一考察——配置と変遷を契機として——

岡 崎 智 暁

序論

本研究では「現世利益和讃」に説かれた思想を考察するわけであるが、すでに多くの先行研究が存在している。その中で真実説、方便説等の様々な解釈が行われてきたわけであるが、本論ではこれらの先行研究も参考にしながら今一度「現世利益和讃」の考察を試みたいと思う。

考察するにあたり「念仏」と「書誌」という二つの視点から「現世利益和讃」を見ていく。一つ目の念仏について、「現世利益和讃」は十五首中九首に「南無阿弥陀仏をとふれば」と述べられるほど念仏の要素が強い。加えて『行文類』大行釈ひいては第十七願との関連も指摘できる。こういった点に着目することで信だけではなく、行の視点から「現世利益和讃」を見ることができるとはならないかと考える。

もう一つは書誌について。「現世利益和讃」を考察するにあたり、本研究では首の配置と教義の関連について注目したいと考える。「現

世利益和讃」には異本間で大きな書誌の違いがいくつか見られるわけだが、和讃の配置の変更が何の意図の介在もなしに行われていたとしたら不自然である。そこで本研究では特に国宝本と顕智本に着目し配置・変遷に内包された意図を読み取り、教義を考察する上での一助としたいと考える。

また、異本とはそれぞれ書かれた年代が微妙に異なっており、その時々で社会情勢も違うと思われる。そのような中で少しずつ形を変えながら製作された異本は存在そのものが社会への対応の結果であると考えられる。そこに介在する意図を読み取ることは親鸞の社会への対応の一端を見ることにも繋がるのではないだろうか。本研究は、念仏、書誌に着目しつつ、「現世利益和讃」のもつ社会への対応力にも着目して論じていきたいと思う。

本論

第一章 『浄土和讃』及び『現世利益和讃』について

第一節 三帖和讃について

まずは三帖和讃について確認しておく。『浄土和讃』、『高僧和讃』、『正像末和讃』をあわせて三帖和讃という。この三帖和讃は和語を以て弥陀浄土の徳を讃嘆したものであり、現在では勸行でもよく用いられている。「現世利益和讃」は『浄土和讃』の末に記載されている。

この三帖和讃だが、異本が多いことが特徴として挙げられる。^①代表的なものとして『聖典全書』に記載されている三種を挙げると国宝本、顕智本、文明本である。簡単にそれぞれの特徴を示しておく^②と、まず国宝本（高田派専修寺蔵国宝本）についてであるが、『高僧和讃』末に「弥陀和讃」と「高僧和讃」とを並べ挙げ、両和讃の首数を合算して記した後にある宝治二年（一二四八年）の奥書から成立年が分かる。また、『浄土和讃』と『高僧和讃』は同時に作成されたものであることも分かる。『正像末和讃』は巻末部分の「夢告讃」の前後に康元二年と正嘉元年（共に一二五七年）の記述があることから、この年の前後の成立が推測されている。また、国宝本は親鸞の真筆を含む唯一の版であり^③資料的な価値も高いと考えられる。しかし、他の版に比べて『正像末和讃』の首数が圧倒的に少なく^④、従来の研究においては草稿本と位置付けられる。

次に顕智本（高田派専修寺蔵正応三年顕智上人書写本）についてであるが、この版は『浄土和讃』と『正像末和讃』のみ現存しており、『高僧和讃』は現存していない。しかし、この版の紙袋には「浄土和讃二冊／正像末和讃一冊／右顕智上人御筆」とあり元々は三帖であったことが分かる。奥書より、『浄土和讃』の底本は建長七年（一二五五年）に成立し、正応三年（一二九〇年）に顕智によって書写されたことが分かる。また、『正像末和讃』は奥書より正嘉二年（一二五八年）に底本が成立したことが分かる。

文明本（文明五年蓮如上人開版本）は、本願寺第八代蓮如が「正信偈」と四帖一部として開版したものであり、^⑤本願寺から聖教が出版された最初の例でもある。しかし、その底本は未だに確定されていない。書誌的な面及び思想的な面から様々な研究が為されているが未だ謎が多い版である。

また、年代を見比べると国宝本『浄土和讃』成立の後に顕智本『浄土和讃』が成立し、その後国宝本『正像末和讃』が成立している。つまり、各異本が三帖ずつ順番に成立したわけではないということである。また、国宝本の奥書が「弥陀和讃」と「高僧和讃」を並び挙げていることや、顕智本の紙袋に「浄土和讃二冊」と書かれていることなどがその例である。^⑥こういった点からも国宝本、顕智本ともに浄土和讃、高僧和讃の繋がりが見える。

本研究では、これらの異本を校合した時に見えてくる構成の差異、特に国宝本と顕智本に着目して論を進めたいと思う。国宝本は成立

が最も早く、一部には親鸞の真筆を含む大変重要なものである。対して願智本は願智の書写本であるが比較検討する意義はあると考える。慶信からの上書に対して親鸞が加筆修正した御消息^⑦が存在するが、そこに

真実信心うるひとはすなわち定聚のかずにいる

不退のくらゐにいりぬれば／かならず滅度をさとらしむ^⑧

という和讃が引かれている。この首の第四句「かならず滅度をさとらしむ」は国宝本及び文明本では「かならず滅度にいたらしむ」と記されており、御消息に引用されるものと同形式の首は願智本のみが存在する。こういった例から願智本と書誌を同じくするものの流布が確かに行われていたことや親鸞がそれを認識していたことが確認できる。そういった点から願智本は比較検討する意義を持つと考へる。そこでまずは次節において「現世利益和讃」に関する国宝本及び願智本の差異を述べ、比較の材料を示したいと思う。

第二節 願智本「現世利益和讃」について

「現世利益和讃」は国宝本と願智本とでその書誌に何点か違いが存在しており、その違いを比較・校合するためにこの節ではその特徴を確認する。国宝本と願智本を比較した際に浮かび上がる「現世利益和讃」関連の差異は次の三点が挙げられる。

(一)「現世利益和讃」全十五首中、最後の五首の並びに違いがある点。

国宝本 一、二、……………一〇、一一、一二、一三、一四、一五
願智本 一、二、……………一〇、一四、一五、一一、一二、一三

右図のように、国宝本を基準とした時に一一首、一二首、一三首目の和讃が願智本では二首分繰り下がった位置に置かれている。

(二) 国宝本と願智本では「現世利益和讃」の位置に違いがある点。
国宝本「浄土和讃」の構成を示すと次のようになっている。

「称讃浄土経文」↓「徳号列示」↓「讃弥陀偈和讃」↓「大経讃」↓
「観経讃」↓「弥陀経讃」↓「諸経讃」↓「現世利益和讃」↓「勢至讃」↓「首楞嚴経」引文」

願智本「浄土和讃」の構成は次のようになっている。

「別和讃」↓「徳号列示」↓「讃弥陀偈和讃」↓「大経讃」↓「観経讃」↓「弥陀経讃」↓「諸経讃」↓「勢至讃」↓「現世利益和讃」↓「別和讃」

国宝本では「諸経讃」、「現世利益和讃」、「勢至讃」という順で次第している。だが願智本では「諸経讃」、「勢至讃」、「現世利益和讃」

の順となる違いがある。

(三) 顕智本「浄土和讃」末尾（現世利益和讃の直後）に別和讃^⑨が五首追加されている点。

右に示した顕智本「浄土和讃」構成図の最後に記してあるように、顕智本では「浄土和讃」の巻頭及び巻末に別和讃が挿入されている。本論では「現世利益和讃」に強く関連しているものとして巻末の別和讃に着目する。

本論ではこういった構成の差異に着目して考察を進める。その端緒として注目したいのが、顕智本「現世利益和讃」末尾の首である。

南無阿弥陀仏をとふれば、十方無量の諸仏は
百重千重圍繞して、よろこびまもりたまふなり（現世利益和讃）

顕智本十五首目 国宝本十三首目

とあるこの首は顕智本において「現世利益和讃」の最後に置かれたことから、別和讃への次第を考える上で重要になると考える。章を改めて詳説するが、本研究では特にこの首に述べられている「諸仏の圍繞」、「諸仏の護念」及び「諸仏のよろこび」について、他の聖教や御消息も考慮しつつ検討を加えていきたいと思う。

第二章 「現世利益和讃」の特徴

第一節 「現世利益和讃」概説

「現世利益和讃」は「浄土和讃」に収録されている。全十五首で構成されており、その名の通り現世利益を説く和讃であるが同じく現世利益を説く現生十益に対して、より具体的かつ物質的な利益が説かれるとされる。

「現世利益和讃」全体の流れを概観してみると、まず初めの四首には念仏の功德の偉大性が述べられている。当時鎮護国家の經典として有名であった「金光明經」の「寿量品」を阿弥陀仏が説いたという解釈や伝教大師が「七難消滅の誦文」において念仏を勧めたという事実は阿弥陀仏の功德の尊さを裏打ちする根拠であったと思われる。次に五首目から十五首目に目を向けると梵王、帝釈天、諸天神、四大天王、堅牢地祇その他多くの冥衆及び観音、勢至を初めとする恒沙塵数の菩薩、さらには無数の化仏による護持が説かれる。

この中で特に諸仏による護持は非常に重要な要素であると考え、本論の中で触れたいと思う。

そしてもう一つ注目すべき特徴として、十五首中九首が「南無阿弥陀仏をとふれば」の句ではじまり、その他三首にも念仏が示されている。つまり「現世利益和讃」とは十二首が念仏に直接関連する首で構成されており、念仏のもとに現世利益が説かれている和讃であることがわかる。

また、書誌的な面に目を向けてみると、「浄土和讃」は「現世利

益和讃」の前に置かれる「諸経讃」まで四行書きで記されている。

しかし「現世利益和讃」と「勢至讃」のみそれまでの四行書きから五行書きに変わっているのである。これは「現世利益和讃」の成立を考察する上で非常に興味深い点であると考ええる。さらに左訓に注目してみると、国宝本「浄土和讃」「現世利益和讃」の題である「現世の利益和讃」の「和讃」部分にのみ「ヤワラゲホメ」の左訓がある。^⑩これは同じ「浄土和讃」内の他の和讃には見られない特異な例である。この「ヤワラゲホメ」の左訓は親鸞が和讃というものをどのように理解していたのかを考察する上で重要な資料になることはもちろんだが、「現世利益和讃」の成立を考察する上でも重要になってくる。先に述べたように、国宝本「浄土和讃」の「現世利益和讃」と「勢至讃」のみ五行書きになっているのだが、この点と「現世利益和讃」にのみ突然「和讃」の左訓が付されていることを併せて考えると、「現世利益和讃」は元々単独で成立していたものが後に「浄土和讃」に編入されたと考えることができる。つまり、もととは独立して存在しており、その時の書式を保持したまま「現世利益和讃」の末に据え付けられたのではないかということである。筆者としては賛同したところであるが、実際にいつ、どのように成立したのかはいまだに分かっていない。

考察を進めるにあたり、まずは「現世利益和讃」に関する研究を概観してみたいと思う。「現世利益和讃」は一見すると特殊であるため真実であるか方便であるかという点が論ぜられていたようであ

る。普賢保之氏が江戸期の宗学をいくつかまとめておられるので参考に^⑪して概説させていただく。

まずは空華学派の祖、僧鎔師であるが、彼は「現世利益和讃」に示された現世利益は法徳であって仮に行者の上で語ったものであるとする。また、香月院深励も「現世利益和讃」を方便とする。四代目能化、日溪法霖師は次の三つの意味を述べている。一つは未信の者を導く方便。二つ目は他宗の現世利益を羨む者に対するもの。三つめは獲信者の信心増上として、「現世利益和讃」は説かれたとす。このように「現世利益和讃」を方便として捉える考え方は決して珍しいものではなかったようである。

こういった点について浅井成海氏は

親鸞の著述全体を見通すときに方便誘引のために和讃が示されたとは考えられない。わかりやくす具体的に種々の表現をとりながら、つねに弥陀の本願の真意が示されているのである^⑫

と述べている。浅井氏は「現世利益和讃」は現生十益ひいては教義全体の視点を以て考えるべきだと述べている。そういった解釈の上で、

親鸞教義全体より見通す時に、念仏申せば、七難消滅する、延年転寿が語られると言うのではなく、如来の本願に帰すれば、七難消滅を説き、冥衆護持を示す諸経論にも、より具体的にどのように弥陀の本願の真意が語られているかということである^⑬

と述べており、「今は光明と名号のはたらきにより、諸悪や諸禍が

転ぜられて善に成るといふ念仏の利益なのである」と述べている。^⑭

つまり諸悪が転じて善となり、入涅槃を証す出世の道が弥陀の本意であり念仏の利益であるとする。「七難消滅」や「定業中天を除く」といった内容に関しても、念仏の功德を示すことと同時に七難や定業中天の起こる世において、光明攝取された我々が善に転ぜられて救われていくところに利益を見ているのであろう。

また、神子上恵龍氏は、

和讃の体裁を見ると決して方便義を述べたものではなくて、本典信巻末の現生十益に含まれていて現益の意味を具体的に開顯されたのに過ぎないのである^⑮

と「現世利益和讃」と現生十益の関連を述べ、「例えば風水害のごときも平生から信仰の厚い人達が、心を合わせてその備えを完全にしておれば、台風が来てもその災害を最小限度に食いとめることが出来るのではなからうか^⑯」と獲信者の生き方は自然と七難をも克服するものであり、現生十益も「現世利益和讃」も共にそれを示すのだという精神的な側面に立脚した解釈をされている。

そして近年では、和讃成立の時代背景がよく注目されており、特に専修念仏に対する論難、弾圧に触れられる。那須英勝氏は「承元の法難」においての「興福寺奏状」や法然没後に出された「延暦寺大衆解」を挙げて、

専ら個人の救済を目的とする専修念仏者の来世的信仰は民衆の現実社会の問題への無関心を高め、その反社会行動を助長する、

という批判があった^⑰

と述べる。おそらく親鸞はこういった論難への対処に手を焼いていたであろうし、専修念仏者を攻撃するという仏法誹謗の行為については末法を感得せしめるきっかけにもなったと思われる。一例を挙げれば、「正像末和讃」に「五濁の時機にいたりては道俗ともにあらそひて念仏信するひとをみて疑謗破滅さかりなり」と末法における念仏疑謗について触れられているところである。

こういった時代背景をもとに「現世利益和讃」の撰述意図を論難への反駁であるとみた研究も為されている。例えば黒田寛忍氏は「現世利益和讃」に鎮護国家、対天台宗、神祇の三つの要素があることを指摘し、これが「延暦寺奏状」の構成と対応すると示している。その上で「現世利益和讃」は「延暦寺奏状」に対する反駁の意図があったと考察されており、しかしてそれは「要するに『現世利益和讃』の内容は念仏者の正定聚の利益として元来あったものが、『延暦寺奏状』を契機に針小棒大に表現されているものと考える^⑱」と、元々正定聚に付随していた利益を以て和讃が著されていたことが推察されている。

以上のような和讃製作当時の社会情勢も踏まえた上での研究に加えて、現在では他にも様々な解釈が存在する。いくつか例をあげる

と、例えば天岸淨圓氏は、
この「現世利益和讃」が当時の一般民衆、門徒に対して、より具体的な念仏の利益を勧め、人々をして信心念仏の行者たらし

めんとする意図を以て述作されたものであらうことが知られる。すなわち、上に詠ぜられた諸聖は当時の民衆を取り巻いていた実際のな宗教的提議をあらわしたものであるとい

い得るであらう。親鸞はこれら従来の宗教權威を否定し、無滅化するのではなく、念仏する身となることにおいて、これらの諸聖がかえって念仏者を帰敬、尊敬し、護持するということを知らしめ、念仏者自身の尊高性すなわち、宗教的權威を覚醒、自覚せしめ、更に、従来の宗教的諸權威に対しては「念仏者守護」という新たな意義を与えていった^②

と述べ、国土安穩や諸聖護持といった既成の宗教世界を念仏に納め、念仏者による新しい宗教世界を構築せしめるものが「現世利益和讃」であるとする。

また、佐々木瑞雲氏は「現世利益和讃」に親鸞の内省を見ている。恵信尼消息において、寛喜三年の折病床に伏している親鸞が無量寿經の読誦を行おうとしたことを内省する場面が記されているが、^③佐々木氏はこの「寛喜三年の内省」に着目している。この内省に着目する前提として、氏は寛喜三年の前々年からの天候不順による大飢饉及び関東の国分寺においての「金光明經」転説を挙げている。そして、親鸞自身が行った衆生救済のための自力祈求の行為と、同時期に行われた衆生救済のための『金光明經』転説を重ねてみたときに親鸞は何を思ったのであらうかと問うている。その上で

果たして、この時の親鸞の経験を考慮するならば、従来の主張

である、親鸞は誤った当時の「現世利益」観への批判をなすことを目的として、この和讃にみられる如き表現をなしたのだと言いつけるだろうか。むしろその表現は親鸞の自力祈求に対する自己「批判」へと導くものとなったのではないだろうか^④と述べている。これは自分も自力祈求を行っている以上、「金光明經」転説という行為自体を批判することができないという親鸞の立場に立つての論である。続けて氏は、

親鸞の「和讃」撰述の思想背景は根本的に常に自己の「体験の転写」であると思われるのであるが、そこで考えられるのはその当時の背景から知られる危機的状况の中、最も身近で起こった衝撃的な出来事として、親鸞自身にも、また民衆にも印象深く記憶されたと思われる民衆救済のための『金光明經』の転説という事実を思い合わせ、自らの行為に対する内省を加味することで、「名号よりほかに不足」なしという弥陀の徳として「現世利益」を讃詠するということを「和讃」撰述の基調としたのではないか^⑤

と、このように「現世利益和讃」を「体験の転写」であるとして内省の側面から捉えている。

このように「現世利益和讃」には様々な解釈が存在する。

第二節 「現世利益和讃」に連なる思想について

従来「現世利益和讃」を解釈する上で信との関わりが注目される

ことが多かった。実際、利益と信とが無関係とは言えないだろう。

しかし、「現世利益和讃」は全十五首中九首が「南無阿弥陀仏をと
なふれば」で始まっており、称名としての側面も無視できない。実
際に「行文類」や第十七願に関連する特徴も存在するため、この節
ではそういった点を指摘したいと考える。

まずは「行文類」との関連を見ていく。従来から「現世利益和讃」
は法然の『選択集』『護念章』との関連が指摘されている。『選択集』
「護念章」には、善導の『観念法門』と「往生礼讃」が引用されて
いるのであるが、興味深いことにこのこと同箇所の「往生礼讃」引文
が「行文類」大行釈にも存在するのである。つまり、共に「往生礼
讃」引文に関連しており「現世利益和讃」と「行文類」大行釈には
重なる点が存在するのである。そこでまず「現世利益和讃」と「往
生礼讃」の文を挙げる。

南無阿弥陀仏をとなふれば／観音・勢至はもろともに

恒沙塵数の菩薩と／かげのごとく身にそえり（『現世利益和讃』 顕

智本十三首目 国宝本十一首目）

無礙光仏のひかりには／無数の阿弥陀ましまして

化仏のおのことごとく／眞実信心をまもるなり（『現世利益和讃』

顕智本十四首目 国宝本十二首目）

南無阿弥陀仏をとなふれば／十方無量の諸仏は

百重千重圍繞して／よろこびまもりたまふなり（『現世利益和讃』

顕智本十五首目 国宝本十三首目）

問うていはく、阿弥陀仏を称念し礼観して、現世にいかなる功德利
益かあるやと。「中略」また「観經」にいふがごとし。もし阿弥陀
仏を称し礼念してかの国に往生せんと願へば、かの仏すなはち無数
の化仏、無数の化観音・勢至菩薩を遣はして、行者を護念したまふ。
また前の二十五菩薩等と百重千重行者を圍繞して、行住坐臥、一切
時處、もしは昼もしは夜を問はず、つねに行者を離れたまはず、と。
「中略」次下の文にいはく、もし仏を称して往生するものは、つね
に六方恒河沙等の諸仏のために護念せらる。ゆゑに護念經と名づく
と。（『往生礼讃』）

こういった点から「現世利益和讃」と大行釈引用の「往生礼讃」
には共通点がいくつか見受けられる。「現世利益和讃」に称名が説
かれている点に加えて出拠が大行釈と重なる点も踏まえると、「現
世利益和讃」における行の要素の強さがうかがい知れる。さらに第
十七願及び「如来とひとし」との関連も示すことができる。そこで
重要になるのが顕智本において「現世利益和讃」の最後に配置され
ている

南無阿弥陀仏をとなふれば／十方無量の諸仏は

百重千重圍繞して／よろこびまもりたまふなり（『現世利益和讃』

の首である。この首は願智本での「現世利益和讃」の特徴を検討する上で重要な首であると考え、ため「教行信証」以外の書物も含めて検討していきたい。

まず「一念多念文意」に「弥陀選択の本願、十方諸仏の証誠、諸仏出世の素懷、恒沙如来の護念は、諸仏咨嗟の御ちかひをあらはさんと^②なり」と述べられており「諸仏咨嗟の御ちかひ」として第十七願が諸仏の証誠・護念と関連付けられている。これより諸仏の「よろこびまもり」が説かれる「現世利益和讃」と第十七願との関連を指摘できる。そして御消息（淨信宛）に「このころのさだまを、十方諸仏のよろこびて、諸仏の御ころにひとしとほめたもうなり。このゆへに、まことの信心の人をば、諸仏とひとしとすなり^③」と述べられており、また別の御消息（笠間の念仏者の問いへの返信）には「しかれば、この信心の人を釈迦如来は、「わがしたしきともなり」とよろこびまします^④」とも述べられる。この二つの御消息より、信心の人は諸仏から喜ばれ、かつ諸仏と等しいものであると褒められることが分かる。「諸仏のよろこび」が示される願智本「現世利益和讃」の最後の首は行者の信心の証誠が示されていると考えられるため「如来とひとし」との関連も考えられる。

以上のように今節では「現世利益和讃」の行の面に着目することから出発して「行文類」や「一念多念文意」、御消息との関連を見

てきた。その中で確認できたのが、諸仏の護念というのは「如来とひとし」や第十七願と関連しているということであり、これらの思想はその説きぶりを少しづつ変えながらも聖教や御消息へと広がりを見せいていることである。

さて、願智本「浄土和讃」が成立したとされるのは建長七年であることは先に述べてきたが、上記に引用した御消息や「一念多念文意」等の晩年の聖教成立もこれとはほぼ同時期なのである。この時代の親鸞思想の特徴として「如来とひとし」が挙げられるが、こうした状況で和讃の構成が変化することにはどのような意味があったのかという疑問が残る。この疑問について考察するために、次節では改めて願智本の書誌に立ち返りたいと思う。

第三節 「現世利益和讃」の配置と変遷について

この節では、国宝本及び願智本二つの「現世利益和讃」を比較し、その書誌にどのような特徴があるのかを挙げたいと思う。

第一項 「現世利益和讃」内の配置変更及び別和讃・「勢至讃」との関連

国宝本と願智本とは首の配置に違いが見られることは先に示した。改めて最後に配置されている首に着目すると、国宝本の時点で

願力不思議の信心は、大菩提心なりければ
 天地にみてる悪鬼神／みなことごとくおそるなり（『現世利益和讃』
 国宝本十五首目）

の首が最後であつたが、願智本時点では

南无阿弥陀佛をとふれば、十方无量の諸佛は
 百重千重围绕して、よろこびまもりたまふなり（『現世利益和讃』願
 智本十五首目）

の首が末に移動されている。第一章で、願智本と国宝本との違いとして「勢至讃」と「現世利益和讃」の位置の逆転や、「浄土和讃」末尾における別和讃の追加を挙げた。そこで本研究においては、願智本の特徴の一つである「現世利益和讃」「別和讃」という順序及び相関に着目する。そこで、位置関係について考察するにあたりまずは別和讃の特徴を確認したいと思う。

まず、別和讃の内容を確認して見ると

弥陀のちかひのゆへなれば、不可称不可説不可思議の
 功德はわきてしらねども、信ずるわがみにみちみてり^③（願智本『浄
 土和讃』末別和讃二首目）
 南無阿弥陀仏をとふるに、衆善海水のごとくなり

かの清浄の善みにえたり、ひとしく衆生に廻向せむ^④（願智本『浄土
 和讃』末別和讃二首目）
 五濁悪世の衆生の、選択本願信ずれば
 不可称不可説不可思議の、功德は信者の身にみてり^⑤（願智本『浄土
 和讃』末別和讃三首目）

無明法性ことなれど、心はすなわち一なり

この心すなわち涅槃なり、この心すなわち如来なり^⑥（願智本『浄土
 和讃』末別和讃四首目）

罪業もとより所有なし、妄想顛倒よりおこる

心性みなもとよければ、衆生すなわち佛なり^⑦（願智本『浄土和讃』
 末別和讃五首目）

となっている。一首目、二首目、三首目を見ると弥陀の誓い、念仏、信心を以て功德が獲信者の身に与えられることが読み取れる。そして続く四首目、五首目は衆生の心と仏の心が等しいことが述べられる。これを先の三首からの流れでみると獲信者の心が如来とひとしいものへと成っているとも解釈できる。つまり別和讃には「如来とひとし」に通ずると思われる思想が説かれていることがわかる。そして前節で述べたように、「現世利益和讃」の最後に置かれる首にも「如来とひとし」に通ずる面がある。こういった点に別和讃と「現世利益和讃」の関連及び「現世利益和讃」から別和讃への次第といったものが見えてくる。

また「勢至讃」についてであるが、国宝本では「浄土和讃」の最後にあり、念仏伝持や法然の本地を表す勢至菩薩関連の和讃、引文を置くことで『高僧和讃』との接続を円滑にする意図があったのかもしれない。しかし国宝本成立時において、「勢至讃」は「浄土和讃」成立後に挿入されたと考えられている。なぜなら国宝本「浄土和讃」において「現世利益和讃」と「勢至讃」との間にある「已上彌陀一百八首」の「一百八首」と、国宝本「高僧和讃」の奥書にある「都合二百二十五首」の「二百二十五」には「勢至讃」八首が含まれておらず、奥書が記された後に編入されたことはほぼ確実だからである。故に「勢至讃」は国宝本時点の「浄土和讃」において最後尾にならざるを得ない。そのため「現世利益和讃」から「勢至讃」へと次第する配置に意味を見出すのは難しく、「勢至讃」が「現世利益和讃」の後に来なければならない積極的な理由は考え難いと思われる。

以上のように別和讃と「勢至讃」の特徴を踏まえて統合的に考えると顕智本「現世利益和讃」の構成に違いがあることの理由は別和讃を中心に考えるべきだと思われる。顕智本では「現世利益和讃」内の配置が変わり、その変化によって和讃の最後に配置された首に関連する別和讃が追加されている。つまり、別和讃が新たに挿入された結果、別和讃と「現世利益和讃」との関連が意識され、その結果として配置に影響を与えた、という可能性を指摘できると考える。

第二項 「正像末和讃」及び「高僧和讃」との関連

国宝本「正像末和讃」の内容を簡潔に示すと、末法における衆生について説かれており、念仏を称え、弥陀の本願を信じることで無上覚へ至る、ということが述べられる。つまり「正像末和讃」にはこの世に生きる衆生にまで信心・念仏が至り届いている様が説かれている^⑤。そして、ここで着目したいのが「正像末和讃」と別和讃には関連する部分があるということである。顕智本「浄土和讃」末尾にある別和讃、全五首二首目、三首目、四首目、五首目の首は後に国宝本「正像末和讃」にも収録されることになる。つまり顕智本「浄土和讃」に付されている別和讃とは「正像末和讃」の原型ともいえるものである。故に別和讃も「正像末和讃」と同じように弥陀念仏の教法が末法において流布され衆生に到り届くことが意図されている和讃であると考えられる。そして前項において「現世利益和讃」と別和讃が関連を持つと指摘してきたことを踏まえて考えると、別和讃を通して「現世利益和讃」と「正像末和讃」の重なりも指摘できる。

次に「浄土和讃」と「高僧和讃」の関連についてであるが、従来「浄土和讃」と「高僧和讃」は併せて一つの書として見られていることは第一章において示したが、国宝本と顕智本では事情が少し異なる。国宝本では「浄土和讃」末尾に奥書はなく、「高僧和讃」末尾に「弥陀和讃・高僧和讃都合二百二十五首」と二帖を併せた奥書が存在する。顕智本においては紙袋に「浄土和讃二冊／正像末和讃

一冊「右願智上人御筆」とあり、やはり「浄土和讃」と「高僧和讃」が二帖一具であることは変わりないと思われる。

こういった点から「浄土和讃」と「高僧和讃」の密接な関連を見てきたわけである。しかし、国宝本と異なり願智本には「浄土和讃」末尾に奥書が存在しており、「浄土和讃」単体での成立が推察される。加えて願智本「浄土和讃」末尾には別和讃が置かれているが、この別和讃は「正像末和讃」との関連が指摘でき、かつそれが「現世利益和讃」にも通ずることは先に示した通りである。そういった点から願智本「浄土和讃」は、「高僧和讃」だけではなく「正像末和讃」との関連も意識した構成になっていると言える。

以上のように書誌を見ていくと構成の変化から国宝本成立時点と願智本成立時点では「浄土和讃」と「高僧和讃」及び「浄土和讃」と「正像末和讃」の関係性に違いが見られることも確認できた。そして本項で確認できた最も重要なことは、関係性の違いの中心に別和讃が関連していることである。そこで、こういった国宝本と願智本の構成意図の違いを考察する上で改めて別和讃への検討が必要であると考えられる。

第三章 「現世利益和讃」の再評価

第一節 願智本の構成から見える特徴

願智本の特徴として別和讃が挿入されていることと、それによって「現世利益和讃」と「正像末和讃」との関連が見えてきたが、第

二章の最後でも述べたように、まず「別和讃」に着目する。先にも述べたが、願智本の別和讃は国宝本「正像末和讃」のもとになったと考えられる。そしてその内容は「如来とひとし」に関連していた。「現世利益和讃」と別和讃、共に説かれる「如来とひとし」であるが、その解釈については

等正覚とまふすくらゐは、補処の弥勒とおなじくらゐなり。弥勒とおなじく、このたび無上覚にいたるべきゆへに。〔中略〕正定聚のひとは如来とひとしもまふすなり。浄土の眞信心のひとは、この身こそあさましき不浄造惡の身なれども、こころはすでに如来とひとしければ、如来とひとしもまふすこともあるべしとしらせたまへ^⑦

と述べられるような便同弥勒的な解釈の他に、その行為性（念仏を行ずる先人としての姿）に如来とひとしい点を見るところという理解が存在する。淨信は消息に

また願成就の文に「十方恒沙の諸仏」とおほせられて候は、信心の人とこころえて候。この人はすなはちこのより如来とひとしとおほへられ候^⑧

と、信心の人が諸仏と完全に同一であるという独自の理解を示しているのであるが、親鸞はその返信においてこの言を否定していないのである。

これについて井上善幸氏は、「信文類」の常行大悲の益や「もしよく展転してあひ勧めて念仏を行ぜしむるは、これらをことごとく

大悲を行ずる人と名づく^③」という「大悲經」の引文を挙げて、

阿弥陀仏の本願を聞き信じ、念仏者となることは、平等の慈悲に浴することであり、また同時に念仏一行を他者に伝える媒体となることをも意味する。このように考えれば、諸仏も獲信の念仏者も、ともに念仏を伝えるという行為においては等しいと見なすことは可能である^④。

と、親鸞は淨信の理解の妥当性について、否定されるものではないと考えていたことが推測されている。また、この点について玉木興慈氏は、

更に親鸞は、獲信者を『教行信証』においては「弥勒に同じ」と讃え、和語聖教でも「弥勒に同じ」「如来とひとし」などと讃えるが、このように表現する親鸞の意を示す言葉が、真仏弟子釈御自釈の「釈迦諸仏の弟子」である。自身の往生が決定した正定聚の機の念仏は利他、つまり、法を伝え他を導くということしかないわけである。これを浄土真宗の菩薩行と位置づけることができ、報恩の念仏の意義もここに見ることができ^⑤。

と正定聚の機の念仏に他を導く利他の行を見ている。
この理解は親鸞自身の文からも導けるものである。『尊号真像銘文』において、

「善導は阿弥陀仏の化身也」とのたまへり。「称仏六字」といふは、南無阿弥陀仏の六字をとなふるとなり。「中略」すなはち南無阿弥陀仏をとなふるは、仏をほめたてまつるになると也。

「中略」また一切衆生にこの功德をあたふるになると也^⑥

と称名念仏による功德の回向が示されている。つまり、獲信者と諸仏は全くの同一ではないが、念仏相続の上に獲信者は「諸仏とひとし」い働きを有するということである。念仏を聴く側からすれば、称える側の獲信者は諸仏にひとしいという理解であるともいえる。これは獲信者が念仏を称え、称えた念仏が他者に相続し、信を喚起せしめる関係を表しており、次々に念仏が相続される様が読み取れる。

加えて、別和讃の二首目に、

南無阿弥陀仏をとなふるに、衆善海水のごとくなり

かの清浄の善みにえたり、ひとしく衆生に廻向せむ（願智本「浄土和讃」末別和讃二首目）

と述べられていることも重要になってくる。国宝本においては「かの清浄の善みにえたり」の左訓に「ナモワミアダフチトナフレバミヤウガウニオサマレルクドクゼンゴンヲミナタマハルトシルベシ」とあり、「ひとしく衆生に廻向せむ」の左訓には「ミヤウガウノクドクゼンゴンヲヨロツノシユジャウニアタウベシトナリ」とあり、名号の功德を獲た衆生から衆生への回向を読み取ることができ^⑦る。

この和讃は龍樹の「十二礼」回向文が出拠とされる。善導の「往生礼讃」自信教人信で解釈され、自分にいただいた喜びを一人でも

多く伝えようとすることが示された文であるとされている。この点について三木照国氏は、

龍樹菩薩の作と伝える『十二礼』のむすびの回向文に「われ彼の尊の功德の事を説くもろもの善無辺にして海水のごとし獲るところの善根清浄なる者は衆生に回施して彼の国に生ぜん」といわれてあるものによって七高僧や聖徳太子、ご自分にあだかれた弥陀本願のすくいの方をもつて濁世の衆生を教化し済度された徳を讃嘆されるのである^④

と述べられる。この首は文明本においては「高僧和讃」に置かれるため三木氏はこういった解釈を為しているが、これが顕智本時点では「浄土和讃」にあることを考えると功德を得た衆生から衆生への念仏の相続も考え得ると思われる。

筆者がなぜこのように便同弥勒ではなく「弘通」の面をピックアップするかというと、別和讃が「正像末和讃」、ひいては末法に関連するものだからである。『正像末和讃』は末法への深い嘆き（末法の感得）より作られたと推測されている。当時の飢饉や疫病の蔓延や専修念仏の弾圧は親鸞に末法を意識させるものであったであろうし、これに加えて宮崎圓遵氏は、

親鸞の身辺でも、妻惠信尼は生国越後に帰り、側近の末娘王御前は夫と死別して傷心の身となっている。しかしことの外彼を悲しませたのは、一子善鸞が父に背いて意義を唱えたことで、義絶するの外はなかった。かくて彼の晩年には内外に悲痛なこ

とが多かったから、おそらく一層末法の意識を深められたであろう^④

と『正像末和讃』製作の契機に末法の感得を述べている。これは必然的に別和讃にも関連する。加えて、親鸞は消息において「わが身の往生一定とおぼしめさんひとは、仏の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念仏ころろにいれまふして、世のなか安穩なれ。仏法ひろまれ」^⑤と述べている。つまり晩年の親鸞には、「末法の感得」と「仏法（念仏）の広まりによって世が安穩になることを願う様子」の両様を窺うことができるといえる。

そして顕智本「浄土和讃」に編入される別和讃はこういった時代・状況の中で製作されたのである。であるならば、別和讃から読み取れる「如来とひとし」には念仏の弘通の面が強調して示されているのではないかと考えるのである。故に、別和讃の挿入による書誌の変化は顕智本「現世利益和讃」においても仏法弘通の面を強く見ていたことの現れではないかと考える。つまり、「現世利益和讃」には念仏の利益が説かれ、その内容が様々に論じられてきたが、そもそも弥陀の功德が満ちることで、人々を、念仏を伝えしめる存在へと変えていくこと（諸仏等同）、そして念仏が人々を通じて世に広まることそのものが現世利益であると言えるのではないか。つまり仏の大悲が、それに抱かれることで救いを喜ぶことできた者（諸仏と等しい者）から他の者へ念仏を通じて弘通・相続することこそが顕智本の特徴と行の側面を加味した時に見出すことの出来た「現世

利益和讃」の利益であり、行文類標準に挙げられる諸仏称名の姿とはこういった世界を指すのではないだろうか。

第二節 「現世利益和讃」に見る社会への対応

本節で述べておきたいことは、本論において示してきた理解が顕智本において新たに付加されたという理解ではなく、「正像末和讃」や「別和讃」との関連から、顕智本時点においては特に強調されただけということは留意してもらいたいということである。別和讃がなくとも「現世利益和讃」に説かれる諸仏の護念、囲繞から「如来とひとし」を読み取ることが可能であり、先哲方の解釈も読み取ることでもある。しかし、本論がそうであるように、配置の変遷を契機としたときにそれまで気が付かなかった側面に改めて気付かされる面もあるということである。つまり今回考察してきたような、本論でいうところの「念仏の弘通」といった思想は元々「現世利益和讃」に内包されているものである。あくまで別和讃は「現世利益和讃」が元々持っていた特性を押し出すきっかけとなったのである。つて、「現世利益和讃」を深化、発展させたわけではないと考える。

「現世利益和讃」は教団や専修念仏者を取り巻く問題の解決の中でその社会性が示されてきた。一例を挙げると、専修念仏者に対する論難に対して親鸞は明確な反駁の意思として「現世利益和讃」を製作したという理解であり、その行為に親鸞の社会への対応（社会性）を見るところである。しかし、本研究では異本を校合する

ことで和讃が時機に応じて変化をしてきた柔軟性を確認できた。裏を返せば、「現世利益和讃」の全体像を掴むには様々な時点から考察する必要があるということである。国宝本と顕智本の違いは、基本的には書誌の変化であり文言の変化は少ない。つまり、教義の中心ではなくその見方に変化があるのである。これは教義の深化とは異なり、国宝本と顕智本との間に優劣をつけられるものではない。つまり、時機に迎合して都合のいい新規の思想や解釈を作ることではなく、既にあるものの見せ方を変えることで既存の思想から逸脱することなく臨機応変に社会へ対応することが出来るこの性質を指して「現世利益和讃」の社会性と言えるのではないかと考える。この点も国宝本と顕智本を通して見ることの出来た「現世利益和讃」の特徴である。

結論

本研究では「念仏」と「書誌」という二つの視点から「現世利益和讃」の考察を試みた。考察を始める端緒として、「現世利益和讃」に「南無阿弥陀仏をとふれば」と重ねて述べられている称名に着目し、そこから「行文類」や「一念多念文意」等の聖教、御消息との関連も見ながら「現世利益和讃」について考察を進めた。その中で、顕智本時点において確認することのできる構成の特徴として特に着目したのが「現世利益和讃」の最後の首と別和讃であった。和讃の構成を見ていくことで顕智本「現世利益和讃」は別和讃の

挿入をきつかけに構成が変化しており、「現世利益和讃」と別和讃には何か共通したものがあると予測できた。そしてそれは「如来とひとし」の思想であることが確認できた。さらに、この「如来とひとし」について末法を感得した親鸞の視点から考察した時、そこに念仏の弘通を見ることができた。つまりは、別和讃の編入という構成の変化（書誌）の面に着目した時、念仏の弘通（念仏）の側面を「現世利益和讃」に見ることができたのである。

これが本論で示したかったことの一つである。構成の変化に着目するという新しい方法論を提示し、そこから何が読み取れるのかを考察できたと考える。本研究では顕智本に着目したため、顕智本の特徴より得ることのできる利益解釈を行った。その結果、念仏の弘通という面が強調されていることに辿り着いた。そのため、顕智本「現世利益和讃」から読み取ることができるとして、念仏そのものが人々を介して相続し、弘通されることを以て「現世利益和讃」の現世利益であると述べた。その先にあるのは末法を感得した親鸞より生まれた「世のなかの安穩なれ」という願いである。仏法が広まり、世の中が仏法に満ち安穩になっていく様こそ現世利益であり、それは配置と変遷を契機とすることで知ることができたと考える。

そして副産物のように分かったことがもう一つある。それは構成の変化は和讃の柔軟性と解釈できることである。異本に着目するということは、微妙に異なった年代の思想に着目するということである。異本間の差異に着目した研究自体は以前より行われていること

であるが、此度は「浄土和讃」に着目することで和讃の柔軟性といったものが確認できた。書籍としての和讃は首が集まって構成されている。その構成内容を組み替えることで根本の思想を変化させず、ある面を強調させることが出来ることが分かった。本論ではあまり触れられなかったが、とある首は国宝本、顕智本、文明本で「浄土和讃」、「高僧和讃」、「正像末和讃」と毎回別の帖に配置されているものもある。やはり含まれる帖が異なれば首の意味合いも変化すると思われるが、こういった例を見ても、そもそも和讃とはそういった柔軟性を持つものであることが推測できる。

そして、このような柔軟性をもって筆者は「現世利益和讃」の社会性であると考ええる。柔軟的であるからこそ様々な場面に対応できるからである。従来の研究ではある特定の場面を想定して「現世利益和讃」を解釈することが多かったように思われる。論難への反駁が分かりやすい例であろう。しかし、柔軟な対応を可能とする「現世利益和讃」を一つの場面に押しとどめて解釈することは和讃の良い面を潰しかねないと思われる。それは和讃をうまく活用していた親鸞の本意でもないであろう。そのため「現世利益和讃」を考察する上では、異本の存在も念頭において解釈すべきであるとも考える。

参考文献

書籍

・ 鷲尾順敬『国文東方仏教叢書 法語部上』東方書院、一九三二年

- ・浄土宗務所『法然上人全書』法然上人七百五十年御忌準備局、一九五五年
 - ・神子上惠龍『真宗学の根本問題』永田文昌堂、一九六二年
 - ・桐溪順忍『教行信証に聞く』上、教育新潮社、一九六七年
 - ・三木照国『高僧和讃講義』永田文昌堂、一九七三年
 - ・浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局『浄土宗全書 第十六卷』山喜房佛書林、一九七四年
 - ・浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局『浄土宗全書 続九卷』山喜房佛書林、一九七四年
 - ・宮崎圓達『真宗書誌学の研究』思文閣出版、一九八八年
 - ・真宗高田派教学院『影印高田古典 第二卷 願智上人集 上』真宗高田派宗務院、一九九九年
 - ・小山正文『親鸞と真宗伝説』法蔵館、二〇〇〇年
 - ・平松令三、名畑崇 他『増補 親鸞聖人眞蹟集成 第三卷』法蔵館、二〇〇七年
 - ・林智康『浄土和讃 信を勧め疑いを誠める』探究社、二〇一三年
- 論文
- ・常磐井和子「正像末和讃の成立に関する試論」『高田学報』七〇号、一九八一年
 - ・普賢保之「親鸞聖人をめぐる社会的実践——現世利益和讃を縁として」『真宗研究会紀要』一九号、一九八六年
 - ・天岸淨園「現世利益和讃」の考察——その撰述意図を中心に、及びその後の展開について——『行信学報』通刊六号、一九九三年
 - ・葛野洋明「現世利益の研究」『印度学仏教学研究』四五（一）、一九九六年
 - ・佐々木瑞雲「現世利益和讃」撰述における一視点——『龍谷大学大学院研究紀要 人文科学』二〇集、一九九九年
 - ・門川徹真「唯信鈔文意」の書誌的研究——流布本の特異性について——

- ・『真宗研究』四五号、二〇〇一年
- ・浅井成海「親鸞の現世利益観」『真宗学』一〇五、一〇六号、二〇〇二年
- ・玉木興慈「親鸞思想における「常行大悲」の意味」『真宗学』一〇九、一一〇号、二〇〇四年
- ・黒田覚忍「現世利益和讃」の背景——『真宗学』一一一、一二二号、二〇〇五年
- ・稲田英真「親鸞聖人の「諸仏等同」「便同弥勒」に関する説示について」『真宗学』一二六号、二〇一二年
- ・那須英勝「日本中世社会における専修念仏者の社会性——「七難消滅」の誦文」再考——『龍谷大学論集』四八三号、二〇一四年
- ・井上善幸「如来と等し」の根拠としての第十七願理解について——『真宗学』一二二号、二〇一五年
- ・貫名讓「教行信証」における『往生礼讃』引用の意義について——『印度学仏教学研究』六五（一）、二〇一六年
- ・渥美光「親鸞聖人の法然観とその周辺——願智本『浄土和讃』『勢至讃』を中心として——」『山口真宗教学』二八号、二〇一七年

辞典

- ・『浄土真宗辞典』本願寺出版社、二〇一三年

註

- ①『聖典全書』に記載されているものだけでも国宝本、願智本、文明本がある。他にも永亨本、羽州本、河州本などが存在する。
- ②各和讃の情報は『聖典全書 二』の解説（『聖典全書 二』三三四頁—三三七頁）を参考にした。
- ③真筆と認められているのは「浄土和讃」外題、『称讃浄土経』文、『首楞嚴経』文、圈発点、註記、弥陀徳号の右訓「勢至讃」右左訓の大部分、「浄土高僧和讃」外題、「正像末和讃」の初め九首、「正像

末和讃」右訓及び圈発点。

- ④ 最も内容の充実している文明本『正像末和讃』が「夢告讃」「三時讃」「誠疑讃」「皇太子聖徳奉讃」「愚禿悲歎述懷讃」「善光寺讃」「自然法爾章」で構成されているのに対して国宝本『正像末和讃』は「三時讃」が三十五首、「夢告讃」が一首と末尾に五首あるのみである。
- ⑤ 文明本『正像末和讃』奥書に「右斯三帖和讃并正信偈四帖一部者末代爲興隆板木開之者也而巳文明五年癸巳三月日（蓮如花押）」とある。
- ⑥ 他にも、常磐井和子氏は永享本『正像末和讃』の第三十首の註記に「御自筆浄土和讃下巻奥被載此一首件本如此」とあることを、『高僧和讃』を「浄土和讃下巻」と呼ぶ珍しい例として挙げている。（『正像末和讃の成立に関する試論』『高田学報』第七〇輯、一九八一年、三二頁）
- ⑦ 『真筆消息』四（『聖典全書』二二 七四八頁）
- ⑧ 『浄土和讃』『大経讃』（『聖典全書』二二 三六六頁）
- ⑨ 顕智本『浄土和讃』には巻頭に三首、巻末に五首、「別和讃」が置かれている。なお、実際に「別和讃」の表記があるのは巻末のみである。本論においてはこの巻末にある別和讃について取り扱う。「別和讃」の定義として常磐井和子氏は「和讃として一貫した著作であるが、既成の一連の浄土、高僧の和讃の集には入らないもの」を指すという見解を示している。（『正像末和讃の成立に関する試論』『高田学報』第七〇輯、二二頁）
- ⑩ 『聖典全書』二二 中段、三八六頁
- ⑪ 「親鸞聖人をめぐる社会的実践——現世利益和讃を縁として——」『真宗研究会紀要』一九九号、一九八六年、一七頁—一九頁
- ⑫ 「親鸞の現世利益観」『真宗学』一〇五、一〇六号、二〇〇二年、一〇一頁
- ⑬ 「親鸞の現世利益観」『真宗学』一〇五、一〇六号、一〇三頁
- ⑭ 「親鸞の現世利益観」『真宗学』一〇五、一〇六号、一〇三頁
- ⑮ 「現世利益和讃の研究」『真宗学』三五、三六号、一九六七年、一九頁
- ⑯ 「現世利益和讃の研究」『真宗学』三五、三六号、一七頁
- ⑰ 「日本中世社会における専修念仏者の社会性——「七難消滅の誦文」再考——」『龍谷大学論集』四八三号、二〇一四年、九頁
- ⑱ 『聖典全書』二二 四七五頁
- ⑲ 「現世利益和讃」の背景『真宗学』一一一、一二二号、二〇〇五年
- ⑳ 「現世利益和讃」の背景『真宗学』一一一、一二二号、三九九頁
- ㉑ 諸仏、菩薩、諸天善神、天神地祇、冥府の諸神等。
- ㉒ 「現世利益和讃」の考察——その撰述意図を中心に、及びその後の展開について——『行信学報』通刊六号、一九九三年、九四頁
- ㉓ 『惠信尼消息』五、一〇三五頁
- ㉔ 「現世利益和讃」撰述における一視点『龍谷大学大学院研究紀要人文科学』二〇集、一九九九年、二六頁
- ㉕ 「現世利益和讃」撰述における一視点『龍谷大学大学院研究紀要人文科学』二〇集、二六頁—二七頁
- ㉖ 『聖典全書』二二 三三頁、『註釈版』一六六頁。原文…『聖典全書』二 九五七頁
- ㉗ 『聖典全書』二二 六七〇頁
- ㉘ 『末灯鈔 本』七（『聖典全書』二二 七八八頁）
- ㉙ 『末灯鈔 本』二（『聖典全書』二二 七八一頁）
- ㉚ 『聖典全書』二二 下段、四〇〇頁
- ㉛ 『聖典全書』二二 下段、四六六頁
- ㉜ 『聖典全書』二二 下段、四六六頁
- ㉝ 『聖典全書』二二 下段、四六六頁
- ㉞ 『聖典全書』二二 下段、五二六頁
- ㉟ 『聖典全書』二二 下段、五二六頁
- ㊱ 『聖典全書』二二 下段、五二四頁
- ㊲ 『聖典全書』二二 三二七頁より

③⑨ 宮崎圓連氏は「前二帖（『浄土・高僧和讃』）は弥陀念仏の教法とその信奉の伝統とを讃詠するのに対し、この一帖（『正像末和讃』）はその流布の時代を説くところであるから、全然別個ではなく、もともと一連につながるものであることは没却できない」と述べる。

（『真宗書誌学の研究』三四三頁）

③⑦ 『末灯鈔 本』三（『聖典全書 二』七八三頁）

③⑧ 『御消息集（善性本）』二（『聖典全書 二』八五六頁）

③⑨ 『信文類』真仏弟子釈（『聖典全書 二』一〇一頁、『註釈版』二六〇頁）

④① 「如来と等し」の根拠としての第十七願理解について『真宗学』一三二一号、二〇一五年、一七頁

④② 「親鸞思想における「常行大悲」の意味」『真宗学』一〇九、一一〇号、三七五頁

④③ 『聖典全書 二』六二四頁

④④ 『高僧和讃講義』永田文昌堂、一九七三年、四二九頁、参照。

④⑤ 『真宗書誌学の研究』二二四頁

④⑥ 『親鸞聖人御消息集』七（『聖典全書 二』八三〇頁）